

笑う福島／笑わない福島

——原発事故後のユーモアに関するコミュニケーション社会学的研究——

一橋大学大学院・日本学術振興会特別研究員 庄子 諒

1. 目的

本報告では、東日本大震災および福島第一原発事故後の福島で暮らす人びとが、なぜ原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題を笑いのネタにするユーモアを用いたコミュニケーションを行うことができるのか／できないのか、について明らかにすることを目的とする。

震災後の福島では、同じ立場に見える被害者どうしのコミュニケーションにおいて、住民間の分断が指摘されている。この「コミュニケーション分断」の難点は、原発事故や放射能汚染に関するコミュニケーションを試みると、その立場が、放射能汚染は安全か／危険かといった二項対立に回収され、避けがたく分断が生じてしまうジレンマ的構造にある。したがって、そうした分断を深めかねない話題は語りがたいものとなり、人びとは沈黙することになる。

しかし、本報告で着目するのは、あえて原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題をネタにする「ユーモア」である。「笑い」に関連する先行研究では、笑いが既存の社会秩序への抵抗や現実からの離脱となり、癒しや緊張関係の緩和、解放の契機となりうることが示されている。そうした笑いは、福島ではいかなる条件で可能となり、いかに抑圧されているのか。こういった問いの検討を通して、震災後の福島におけるユーモアを用いたコミュニケーションの可能性／不可能性について明らかにし、コミュニケーション分断の問題を乗り越える方途を探る。

2. 方法

報告者はこれまで、福島県中通り地方の都市部をおもなフィールドとして調査を行ってきた。本報告では、2016年に福島市で実施したインタビュー調査および座談会への参与観察で得られたデータを中心的に取り上げ、分析を行う。具体的には、在県ラジオ局のバラエティ番組制作スタッフ・アナウンサーへのインタビュー、震災後の生活のなかでのユーモアの実践に関する中通り地方住民の経験的語り、震災後の福島をネタにした漫才を創作したお笑い芸人へのインタビューなどである。

3. 結果・結論

分析の結果、ユーモアを用いたコミュニケーションの可能性／不可能性について、おもにユーモアや笑いと当事者性との関係に焦点を当て、それぞれの条件を抽出して示すことができた。

まず、福島を取り巻いているのは、不可能性、すなわち笑えなさである。いまでも続く原発事故の悲惨な被害の実情は笑えなさを生み出し続けているし、自らをその非当事者であると位置づけたり、当事者であっても相手に笑ってもらえない懸念を抱いたりすると、ユーモアを用いたコミュニケーションは困難になる。そして、こういった不可能性が辿り着いた先は、むしろそうしたユーモアを用いることを一切回避し、福島が抱える問題に触れることから「離脱」することによって笑いを可能にする、いわば「笑わない福島」というコミュニケーションの戦略であった。

対して、ユーモアを用いたコミュニケーションの可能性としては、当事者を主体として、一時的な癒しの笑い、内輪の笑い、自虐の笑いなど、困難さを含みながらもいくつかのケースが見られた。そのなかで特に注目したいのが「共感」の笑いである。県内外でそれぞれに震災を経験したさまざまな人びとにとって、共感しうる感情が込められたユーモアは、多様な立場の人びとが共有しうるものを確かめあい、ともに笑いあう場を可能にしていた。このような「笑う福島」のコミュニケーションは、多くの限界はあるものの、コミュニケーション分断のなかで少なからず自由や解放を感じさせ、立場の対立や分断を越える回路を開く契機となる可能性を持っているのではないだろうか。